

奈良教育大学附属小学校事件の争点と 問題構造

なかしま てつひこ
愛知工業大学
著書:『国家と教育』(青土社、2020年)ほか

内における相互の人事交流を実施する(令和六年四月)。」とした。

一部メディアは「奈良教育大附属小の不適切授業、閉鎖環境で常態化」などと報じたが、⁽³⁾附小の教育実践はこれまで高く評価されてきた。この騒動のきっかけをつくった附小の校長(当時)でさえ、「本校の教員は子どもに対して実に丁寧なきめ細かく指導していたことは間違いない、驚くほど前向きに自分の言葉で話せる児童が多いことも事実」と述べ、附小では優れた教育実践が行われていたと認めている。附小の教員や教育実践に対する保護者や卒業生からの信頼は厚い。保護者からは「先生を出向させないで」「これまでの教育実践を続けて」との声が寄せられている。学校が変えられつつあることに気づき、それを止めようと児童たちも声をあげた。⁽⁴⁾三月三十一日に奈良市内で開催された市民集会には四五〇人以上が集まり、保護者からは附小の教員と教育を守ってほしいとの発言が相次いだ。教育研究者有志の緊急声明(<https://sites.google.com/view/educareandschool>)には、短期間に五百人も教育研究者から賛同が集まった。研究者から見ても、奈良教育大の行為は異常すぎるのだ。

今年附小に残った教員は、四月以降も教育の質を低下

一 奈良大附小事件

奈良教育大学(以下「奈良大」という)は二〇二四年一月、附属小学校(以下「附小」という)の「教育課程の実施」⁽¹⁾と学校運営に「不適切」な点があったと断定し、附小に是正措置を講ずるよう命じた。また、附小で中核的な役割を果たしてきた教員一人に対して学内他部署への配置転換を、三人に対して公立小学校への出向を命じた。奈良大は専任教員のほぼ全員の出向を予定しており、来年度はさらに多くの教員を出向させるという。⁽²⁾

この出向命令について、奈良大は「奈良教育大学附属小学校における教育課程の実施等の事案に係る報告書」(二〇二四年一月九日、以下「学長報告書」という)で、「不適切事項の発生要因」として、①「当校への監査が不定期であり、また、情報公開、外部評価等、開かれた学校としての運営が不十分」であったこと、②公立小学校との相互人事交流が受入れのみに留まっていたなど、閉鎖的な側面があった」ことを挙げ、「組織改善」のためには「当校以外の学校における教育課程や学校運営等に関する理解を深めるため、奈良県教育委員会や当機構

させないよう奮闘している。しかし、附小の子どもたちは信頼してきた教師を奪われ、深く心を傷つけられている。保護者たちは、子どもの学びと成長が脅かされていることに不安を抱いている。出向・配置転換された四人の教員は誇りをもって働いてきた職場を奪われた。これは働く者に対する深刻な権利侵害であるだけでなく、人格を深く傷つけるものである。

奈良大は、附小の教育課程と学校運営は不適切だと断定し、附小教員を排除し、長年にわたる教育研究の成果に基づき豊かな教育実践を葬ろうとしている。この奈良大の行為こそ厳しく問われなければならない。この問題は現在、不当な出向命令に焦点が当たっているが、それは一連の出来事の一角でしかない。二〇二三年四月以降あるいはそれ以前から、⁽⁵⁾附小を舞台に展開され今日も展開しつつある一連の出来事をどう呼ぶべきか。本質を的確に表現する言葉を見つけなければならないところだが、ここでは一旦「奈良大附小事件」と呼ぶことにする。⁽⁶⁾

二 出向命令無効確認訴訟

公立学校への出向を命じられた附小教員三人は